2024.10.25 JSET SIG

高等教育マイクロクレデンシャルの解説（書評）

中央大学文学部 特任助教　澁川幸加

sshibukawa193@g.chuo-u.ac.jp

本発表の概要

■経済協力開発機構(OECD)編著『高等教育マイクロクレデンシャル――履修証明の新たな次元』の概要を報告

- ●2020年、2021年にOECDが出版したOECD加盟国におけるマイクロクレデンシャルの提供実態をまとめた報告書の翻訳書

■日本の大学教育に示唆的な点に着目して情報共有

- ◆本発表は日本通信教育学会の書評へ寄せた原稿をもとに発表を構成。

澁川幸加. (2023). 書評・図書紹介 経済協力開発機構 (OECD) 編著 『高等教育マイクロクレデンシャル 履修証明の新たな次元』. *日本通信教育学会研究論集*, 58-61.

本の内容

本書の概要

■従来の正規教育課程を「代替」すると位置づけられるクレデンシャルが急増している。

◆「国の関係教育当局に独立した正規の教育資格として認められていない資格」である「代替的クレデンシャル」

■代替的クレデンシャルの形態

◆①修了証

◆②デジタルバッジ

◆③マイクロクレデンシャル

◆本書には、代替的クレデンシャルの一形態である「マイクロクレデンシャル」の詳細と動向が詳述されている。

マイクロクレデンシャルとは

マイクロクレデンシャルの定義の共通点：

- 「短期」の教育プログラムで
- 「少量」の学習量に取り組み
- 「クレデンシャルが授与される体系化された学習活動」
  - 従来の学位課程と比較してより柔軟に提供できるように設計されている。
  - １つの学習テーマに関する知識の習得や１つのスキルの獲得に重点を置くなど、学習内容の焦点が絞られている特徴がある。

マイクロクレデンシャルの提供者と提供形態

■提供者のエコシステム
- ◆教育訓練機関（公共および民間）
- ◆専門職団体
- ◆教育セクター以外の民間企業
- ◆非営利団体や国際機関

■民間では営利目的だけでなく、非営利目的のプログラムも展開されている。
- ◆例：Googleは約6ヵ月でプロジェクトマネジメントやデータアナリティクスなど雇用主の需要が高い分野を学ぶことができるGoogle Career Certificateを提供しており、恵まれない学生へ向けた奨学金や無料の職業指導も提供している。

マイクロクレデンシャルの学習者

■既に高等教育の学位を取得し、社会経済的に恵まれている成人が多い

◆背景：国策として社会人のリスキリング・アップスキリングを促進する手段としてマイクロクレデンシャルを奨励する国

◆雇用者に対しマイクロクレデンシャルの費用を助成する先進的な企業の存在

■学問分野ごとにジェンダーの偏りも見受けられる。

◆MOOCs参加者のデータ分析の結果に基づくと、STEM分野では学習者に占める男性の割合が高く、教員研修プログラムでは学習者に占める女性の割合が高かったという（p.57）。

マイクロクレデンシャルプログラムの分類（p.31）

■既存のマイクロクレデンシャルは、以下の特徴で分けられる。

①積み上げ可能であるか
②国が認定する証明書を発行するか
③教養指向であるか
④職業指向であるか
⑤共通通貨での学習単位を明示しているか

マイクロクレデンシャルで提供されているプログラムの特徴

マイクロクレデンシャルのコンテンツには、

- 歴史など③教養指向のテーマ
- データサイエンスや教員養成など④職業指向のテーマ
- 特定のスキルや一般的なスキルの向上、認知能力や非認知能力の向上を意図したものなど様々ある。
  - ただし主な対象者はリスキリングを目的とする社会人であるため、市場のニーズに沿ったテーマが目立つ。
  - 現在、多くはノンフォーマルな教育で行われている。

マイクロクレデンシャルの①積み上げ可能性

■マイクロクレデンシャルは、
従来の学位課程を補完・代替するために設計されている場合と、
学位課程とは切り離されて設計されている場合がある。

- ◆前者ではマイクロクレデンシャルとして提供されているプログラムに単位（credit）が付与されており、卒業要件に加算することが可能である。
- ◆後者の中には、履修歴を証明できるだけで、学位取得に向けた単位として積み上げられないプログラムもある。

■カリキュラムとマイクロクレデンシャルの接続がデザインされている事例

- ◆シカゴ大学やHEC経営大学院のmaster trackでは、課程の一部としてマイクロクレデンシャルによる単位を積み上げる（①）ことが可能。

▶ ②国認定の証明書の発行、⑤共通通貨

■国が認定する資格枠組み（②）に準拠した短期プログラムも展開

- ◆スイスによる高等学習サーティフィケート（Certificate of Advanced Studies: CAS）
- ◆高等学習ディプロマ（Diploma of Advanced Studies: DAS）
- ◆スコットランドによる積み上げ可能な大学院資格（Scottish Credit and Qualifications Framework: SCQF）等

■海外では複数の大学で単位を積み上げて学位取得を目指す人がいる
→累積できるように単位を「共通通貨化」（⑤）する必要がある。

- ◆一般的には、欧州高等教育圏全体で認定されている単位制度であるECTS単位が広く用いられている。

マイクロクレデンシャルの特徴と日本への示唆

- 現在の我が国の大学教育の多くは、学習者を正科生、併修生、科目等履修生など目的別に入学区分を分けたうえで、学位取得に向けた教育課程上の学習コンテンツを提供している。
- 他大学との単位互換を推進している大学もあるものの、複数の大学を通じて単位を累積することを想定したり、国際基準での単位互換や単位の積み上げを想定した科目を開講したりしているところは極めて少ない。
- 我が国の大学教育をグローバル展開する際に、①積み上げ可能性、②国認定の証明書の発行、⑤共通通貨の動向は示唆的だといえよう。

学位プログラム VS マイクロクレデンシャル

■学位プログラムと比較した際、マイクロクレデンシャルにはスピードという強みがある（p.103）。

■オンラインで提供される場合は特に迅速な開発と展開が可能となる。

◆→職務上必要な特定のスキルを補填するためにマイクロクレデンシャルを利用したり、既存のスキルを明確化・証明するために利用したりすることができる。

■マイクロクレデンシャルは「持ち運びやすく」「少量で」「短期間」であるため、社会人は学位プログラムよりも気軽に補填・証明する手段として利用できる。

◆ただし、①積み上げを想定する場合、マイクロクレデンシャルの質の保証や等価性が論点となる。

◆実際、質や等価性の保証にむけた規定の策定が進んでいるところであるが、規定が厳密になると、マイクロクレデンシャルを運用するスピードは鈍化の一途をたどる。質と開発のスピードとのバランスは今後も論点として上がるであろう。

マイクロクレデンシャルの難しさ

- マイクロクレデンシャルの価値の証明は政府はあまりできず、雇用主によって決められる
- 高等教育機関はクレデンシャルの承認には信頼関係の構築が不可欠→単位としての通用性は容易ではない可能性（p.89）

日本への示唆

日本におけるマイクロクレデンシャル

■マイクロクレデンシャルの前身は生涯学習用コンテンツやMOOCs
→短期間の学習プログラムやそれの修了を証明するアイディア自体は新しいものではない。

■ただし新型コロナウイルスによるパンデミックをきっかけにオンラインによる短期学習プログラムの開発・提供・助成が加速
→オンライン学習コンテンツの修了を証明するデジタルの修了証やバッジを（有料で）発行できるような制度・プラットフォームも発展

国内：

◆2019年　学習歴のデジタル証明としてオープンバッジを発行する一般財団法人オープンバッジ・ネットワークが設立

◆2024年度よりサイバー大学でマイクロクレデンシャルを導入した新カリキュラムが国内で初めて導入

マイクロクレデンシャルと大学通信教育の違い

■主な学習者の違いから生じる格差の是正と拡大の違い

◆大学通信教育は歴史的に、低廉な学費で全国の勤労学生や女性に教育機会を提供してきた。

◆しかし現状のマイクロクレデンシャルは、非正規の教育訓練の機会を利用する学習者は労働市場で優位な人口集団に偏っている傾向があるため、包括的な公的助成制度などがない限り「高等教育と生涯学習へのアクセスにおける格差を拡大する恐れがある」（p.106）といわれている。

◆大学通信教育もマイクロクレデンシャルも、教育内容をオンラインや対面等で伝達するという方法は同じである。しかし、対象とする学習者の違いから、大学通信教育のように格差の是正に貢献することも、マイクロクレデンシャルのように格差の拡大につながりかねないこともある。

- （もちろんGoogleの事例など社会的に恵まれない人への教育機会の提供を強く意識しているプログラムもあるものの。）

◆大学通信教育がマイクロクレデンシャルを展開することは方法上親和性が高いと思われるが、その際、本来果たしてきた社会的包摂の機能が失われないように留意する必要があるだろう。

大学教育における本書の意義

■マイクロクレデンシャルは、カリキュラムを再考させる機会も与える。

◆サイバー大学のようにマイクロクレデンシャルを導入したカリキュラムは、既存のカリキュラムを因数分解のように分析することにつながる。

◆マイクロクレデンシャルを導入したカリキュラムは学習者の学習のペースメイクや在学中の学習歴・学習成果の可視化にもつながるため、学習者がカリキュラム体系を実感することに寄与するだろう。

■大学教育への脅威

◆民間のマイクロクレデンシャルの勢いが増すと、リスキリングを目的とした社会人の大学への入学者数が少なくなる可能性も考えられる。

◆各大学がこれまで以上に社会人を想定した大学教育をデザインするうえで、本書は多くの示唆を与えてくれる一冊だといえよう。